

○支援は、第二段階へ

- ・前号でお知らせしましたように、飯野司祭は5月7日に釜石を離れてオホーツク3教会に帰任。5月5日より、下澤司祭が釜石に着任しました。下記の「釜石通信」にもありますように、釜石神愛教会・幼児学園の近くに多数の仮設住宅が建設され、新たな支援の在り方が模索されています。5月22日の夕には、釜石神愛教会において「被災者追悼の夕べ」が、仮設住宅の方々へもご案内して計画されています。私たちも、主日の夕の祈りの中で、この事を覚えて祈りを共にしましょう。
- ・5月12日～14日に開催された教区教役者会において、飯野司祭より釜石での働きについて報告をいただきました。また、5月19日に開催の教区常置委員会には、釜石より下澤司祭が一時帰道され、報告をいただき今後の支援の課題と展望について協議しました。
- ・雨宮春子姉が、看護師・助産師の資格を生かして釜石での約10日間の活動を開始されました。釜石で活動を継続しているJOCs（キリスト教海外医療協力会）が行う支援活動への参加です。
- ・地震発生2か月を経て、①日本聖公会そして北海道教区が、どのような展望を持ち今後の活動をするのか？②諸教会・信徒に、今後どのような活動が期待されているのか？③募金に関する状況と今後の可能性？等について、幅広く理解を得るための中間報告を準備したいと考えています。

○【下澤司祭による釜石通信】

飯野先生の後を受けて釜石に滞在するようになり、ちょうど2週間になります。いつも教区の皆さんの支えを感じながら日々の仕事に励んでいます。ボランティアの一花さんがおられた期間は、まだ避難所や支援物資の集積場所を回り、必要な品物がないかどうか等の情報を収集したり、市内の他教派の教会を訪れるなどの活動がありました。その後、支援物資の流通が確保されるに従い、主な仕事は教会や幼児学園の中身に関することに自ずと移ってきたように思います。また、釜石市内の雰囲気、人々の様子などをお伝えすることによって、復興の進み具合や現在必要なものを顕在化させることも私の任務ではないかと考えています。

釜石は、津波によって市街地の約3分の1が破壊された状態にあります。しかし、無事だった人々も決して穏やかに生活している訳ではなく、町全体が被災地として強いストレスを受けたまま日常生活を送っている状況です。そのような中で教会が祈りの場であり、幼児学園が子ども達にとって安心できる環境であり続けること自体が、大きな宣教的な意味を持っていると感じています。

仙台に管区の支援拠点が確保されるに従い、それに連動する形で連絡を取ったり、訪問を受けられるアレンジの仕事が多くなりました。今後は、更にそのようなタスクが増えることと思います。もはや東北教区の一教会として以上に、日本聖公会全体にとって、被災地復興の象徴的な存在になっていくことと思います。

教会・幼児学園のすぐ近くに、150世帯が入居する仮設住宅ができました。新日鉄釜石のラグビー部練習場だった場所です。ここにはご家族を失い、悲嘆の中にある方々がおられます。また相当長期にわたる滞在が予想されます。それらの人々にとって教会と幼児学園が、少しでも拠り所となって行くことが今後の大きな、そして重要な課題だと考えています。

先週から、一花さんに代わって妻の依子が釜石に参りました。事実上、帯広から牧師館ごと越してきたような感があります。依子は先生たちの休養を確保するために補助として保育に入っておりますが、そこでの先生たちとのやり取りや、子どもたちとの会話から、釜石市民の飾らない生の声を聞くことができます。現状では、私たちの存在は客人の域を出ないものと思いますが、人々の声を真摯に聞くことを通じて、少しずつ必要とされる存在として認められることを願っています。

○支援物資・ボランティアに関して

・各教会からの支援物資の送付は引き続き停止中です。

・ボランティア登録カードは、各教会に配信され、教区のホームページからダウンロードする事もできます。支援活動が、長期となる事を予想していますので可能な時期をご登録下さい。

※（ボランティア派遣に関する詳細は前号を参照ください。）

○管区の動き

日本聖公会は、仙台に「支援オフィス」を設け、中村淳司祭（東京教区・管区宣教主事）が、常駐者として着任。仙台基督教会のごく近くに事務所用のフロアを借りると共に、複数の専従スタッフを備えたオフィスとして東北教区と連携して、情報収集、被災地における活動拠点間の連絡や、ボランティアの派遣業務、広報活動を行います。この事により、日本聖公会全体や関連団体（立教大学など）が持っている人的資源を適切に活用して、広範で展望のある復興支援にあたる事が期待されています。教区の支援室ニュースでは、釜石での働きを中心に取り上げていますが、被災地全体での日本聖公会の活動については、東北教区ホームページで見ることが出来ます。

○支援活動をなさった方々から

聖公会や教区の窓口を通してだけではなく、私達の身近な方々が、既にたくさん被災地に赴いておられます。これらの方々からの声を「支援室」では、順次紹介していきたいと思えます。

【大友 宣 さん】より

現職：横須賀市にあるキリスト教病院「衣笠病院」と関連の「湘南国佐村クリニック」で勤務。普段は在宅医療、在宅ホスピスの仕事に就いておられます。

活動内容：3月27日から3月29日まで、釜石市での医療視察

「“フツウ”に悲しむ」 涙と共に種を蒔く人は 喜びの歌と共に刈り入れる（詩編 126:5）

被災者の一人とお話する機会がありました。彼女は「私も他人事ではないのよ」と言って、夫が津波で流され、流れ着いたところでは息があり近所の方が蘇生処置をしてくれたが、程なく亡くなってしまったことを話されました。数週しか経っていない時に、深い悲しみの出来事を極めて淡々と話している様に私には感じられました。このような過酷な状況下では、もしかすると、“フツウに”悲しむというのはなかなか出来ないのかもしれませんが、“フツウに”悲しむというのは落ち着いた生活や家族がないとなかなか難しい様に思います。被災した人やそのご家族が、フツウに生活し、フツウに悲しむことが出来るように支援することが必要です。フツウに悲しむことができるような生活が復興につながっていくように思います。紀元前のイスラエルの人たちは、外国によって街が徹底的に破壊され、遠い土地に奴隷として七十年くらい移住させられていました。その人たちがついに故郷に帰るときに歌ったのが冒頭の詩編です。現代の東北の被災地でもこれは真実味のある言葉ではないでしょうか。（衣笠病院の月報に掲載の一部より）

○支援室より

・「大震災市民ネットワーク・むすびば」による市民向け報告会が、26日（木）午後7時より札幌駅北口の「エルプラザ」で開かれます。是非、ご参加を。

・次回の支援室会議は、5月27日（金）、午前10時30分より教区会館で行います。特に、①道内で出来る取組みについて。②幅広く行き渡る広報の仕方について。協議と作業をしたいと思います。今後とも支援室の働きのために協力者を求めています。どなたでも、是非、ご参加ください。

【震災支援室からのお願い】

◎ ニュース定期便は、各教会において掲示下さると共に、増刷して配布ください。

◎ 教会や個人での取り組みについても、お知らせください。他の教会の活動の参考になります。

【連絡・問合せ先】 電話：011-561-0451、ファクス：011-736-8377

Eメールアドレス：saigai@nsskk-hokkaido.jp